紀伊半島大水害10年からのレジリエンスに関するシンポジウムと調査・研究

地域が本来持つ防災力と知恵を引き出す

▶ プロジェクトメンバー

○宮定 章（災害科学・レジリエンス共創センター）
塚田 晃司（システム工学部）
平田 隆行（システム工学部）
南出 考（Kii-Plus価値共創研究員）

○はプロジェクト代表

▶ 共創相手

和歌山県社会福祉協議会
古座川町
南紀熊野ジオパークセンター
一般社団法人国立大学協会
和歌山大学紀州経済史文化史研究所

プロジェクトの背景

災害科学・レジリエンス共創センター（以下、災害センター）設立、2期目になる2021年は、東日本大震災・紀伊半島大水害10年である。

これまでに和歌山大学災害センターでは、教育としてボランティアバスの運行、研究として災害センターのメンバーが中心となり基盤研究（A）「平成23年台風12号豪雨災害情報に基づいた実効ある防災・減災対策の構築」等を行ってきた。

また、一般社団法人国立大学協会の協力を得、「紀伊半島大水害の経験を踏まえ、これからの地域防災を考える（2012年12月）」、「紀伊半島和歌山県のこれからの災害をイメージする（2014年1月）」をテーマに、防災・日本再生シンポジウムを開催してきた。

紀伊半島大水害10年（2021年）を機に、災害センターでは、この10年を振り返り地域の防災力を掘り起こす活動に取り組むべきと考えた。

プロジェクトの目的

紀伊半島大水害10年を迎え、県民の防災意識を高める機会と捉え、一人でも多くの県民の命と生活を守るため、地域社会と連携し、災害に関する課題解決を目指す実装に向けて取り組み、和歌山県の防災力強化を目指すことを目的とする。

【図1】 シンポジウム（オンライン）会場の様子

プロジェクトの活動内容

今一度、自然の怖さ、防災の知恵の大切さ、避難生活での助け合いを振り返り、地域の力を再確認する場をつくることで、当時生まれていない若い世代や、知らない人にも語り継ぐ機会とし、防災意識の向上と地域への愛着を増すために、シンポジウムと調査・研究の2つのプロジェクトを行った。

①シンポジウム

2021年11月27日（土）13:30～16:40、協定を結んでいる南紀熊野ジオパークセンターから、オンライン（YouTube）配信を行った。参加者190名（社会福祉協議会等の災害ボランティア関係者をはじめ、自治

体関係者、企業、一般市民の皆様、大学教職員、大学生等）は、オンラインを通じて視聴した。現在も本学のYouTubeチャンネルで、配信しており、常時視聴できる[1]。

シンポジウムのテーマは、「これからの災害ボランティア・地域の支え合い～紀伊半島大水害10年とコロナ禍の経験から～」で、開催趣旨は以下である。

『2021年は、紀伊半島大水害から10年の節目の年です。被災された地域には、地域の支え合いとボランティアで乗り越えてきた活動の実績があり、10年が経過した現在でも、「子供たちに同じつらい目にあわせたくない」と取り組んでいる挑戦があります。

また昨今、コロナ禍の影響で、これまでの行動様式をそのまま活かすことができない時代に突入しました。地域自治と災害ボランティアの関係も変わらざるを得ず、災害が発生してもすぐにボランティアが駆け付けられません。コロナ禍の中で発生した令和2年7月豪雨での災害ボランティア活動からは、どのような課題と教訓が見えたでしょうか。

本シンポジウムではこれら二つのことから、災害から身を守る知識を改めて学ぶとともに、これからの災害に、地域社会とボランティアがどう備えていくべきかを考えます。(開催概要より)』

シンポジウムは、2部制で、第1部は基調講演、第2部はパネルディスカッションを行った。

第1部の講演1「紀伊半島大水害を振り返り、これからの災害に備える」は、本学災害センター客員教授後誠介氏より、講演2「災害時に期待される力～災害ボランティア・地域の支え合い～」は、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授 /特定非営利活動法人日本防災士会理事長室﨑益輝氏が行った。

続いて第2部のパネルディスカッションでは、「紀伊半島大水害における災害ボランティア」和歌山県社会福祉協議会和歌山県災害ボランティアセンター所長南出考氏、「大災害の教訓を活かした取組み～チーム熊野川住民災害ボランティアセンターの挑戦～」新宮市熊野川町のチームくまのがわ下阪殖保氏、木村康史氏、「コロナ禍の学生災害ボランティア活動を通じて学んだこと」熊本学園大学社会福祉学部山北翔大氏、「コロナ禍における災害ボランティア活動と地域福祉の課題と教訓」熊本学園大学社会福祉学科教授高林秀明氏から、報告を頂いた後、室﨑益輝氏をコメンテーターに、ディスカッションを行った。

②調査・研究

10年前の紀伊半島大水害で被害はひどかったものの、水害による直接の死者は0人（関連死3人）である古座川町を調査対象とし、本学の紀州経済史文化史研究所の「オーラリティによる歴史・文化発掘とオーラルヒストリー・アーカイブ構築」の一部である「紀伊半島大水害をめぐる災害復興のプロセス（代表：山神運営委員)」と合同で調査・研究を行っており、今後も調査を継続する。

プロジェクトの成果

静岡大学と当大学の行っている半島研究フォーラム（2022年2月19日）にて、「紀伊半島における災害レジリエンスの取り組み」として、紀伊半島の災害時の課題と共に、調査から把握した半島に今も残る災害対応力を報告した。今後も地元大学（災害センター）が、知見を学内外で共有し、今後の紀伊半島の地域貢献に関わるための資源としていく。

注

[1] これからの災害ボランティア・地域の支え合い | 和歌山大学_災害科学・レジリエンス共創センター https://youtu.be/GEIOiAic_-4

プロジェクトに関するお問い合わせ
災害科学・レジリエンス共創センター　E-mail : bousai@ml.wakayama-u.ac.jp
URL : https://www.wakayama-u.ac.jp/disaster/